2026－1－5

44【街の散策からの気づき発見】

春日部市の「酉の市」

会員　K.T.

粕壁酉の市

翌日の粕壁神明社

熊手の露店

翌日の粕壁神明社

本堂御開帳

翌日の粕壁神明社

12月14日、午前中は雨、午後は曇りになったので、粕壁神明社の「酉の市」に出かけた。雨の「お酉様」でなく幸いだった。粕壁神明社の歴史は、境内看板によれば、

「当社の御祭神は天照大神です。天明年間(1781～89)に地元の豪族九法四朗兵衛が竹藪の土中から厨子に入った神体と鏡が出てきたので祠を建てて祀ったのが当社の始まりであるという。当社は七月二十一日の例祭と十二月十四日の十四日の新穀感謝祭の年2回の祭りが行われる（中略）新穀感謝祭は、明治以降は商売繁盛を願う祭りとなり、『春日部のお酉様』として大宮氷川神社の「十日市」に続く酉の市で、福熊手を売る露店が並び、多くの参詣者が訪れる。(後略)」

粕壁神明社は、年2回の日にちで決められた例祭のためにある場所のようだ。鎮座年月は不詳、九法四朗兵衛（くのうしろべえ）なる人物も伝承の人らしい。「酉の市」がいつから始まったのかも不明である。伝承にある天明年間は江戸時代の3大飢饉となった天明の大飢饉(1782～88)や浅間山の噴火(1783)があり、歴史的には苦難の時代だった。そんな時代に粕壁神明社は建てられたようだ。神社の用語で「社」とは「神社」の略称、比較的小さな神社の社号で、大きな神社から御祭神を勧請した神社に用いられる、とされている。神明社は、伊勢神宮を総本社とし、天照大神を主祭神として祀る神社を意味する。

余談ながら、「酉の市」は関東地方を中心に30ヶ所以上で開催されており、次の「関東三大酉の市」が有名である。

(1).鷲（おおとり）神社(浅草　鷲神社)：東京都台東区千束 3-18-7　(2).花園神社：東京都新宿区 5-17-3

(3).大國魂（おおくにたま）神社：東京都府中市宮町 3-1

現在につながる「酉の市」のはじまりは江戸時代、江戸近郊の花又村（現在の東京都足立区）にある大鷲神社（鷲大明神）からで、当初は近郊の農民たちが収穫を祝って、鷲大明神に鶏を奉納する素朴な収穫祭として行われており、農作物や農具が売られていたようだ。いつしか、福を「かきこむ」として縁起物の熊手が売られ、江戸時代中期になると、実用的な熊手が装飾を施した縁起熊手と変化し、商売繁盛や開運招福を願う性格の祭りに発展した、という。「酉の市」の起源には、神道と仏教の2つの説がある。神道説は、神話の世界になる。日本武尊が東夷征討の際に、鷲宮神社（埼玉県久喜市鷲宮　1-6-13）に戦勝祈願をし、帰途に大鷲神社（東京都足立区花畑　7-16-8）で成功を祝ったことに由来するとされ、日本武尊が亡くなったのが11月の酉の日であったため、「大酉祭」の祭礼を行ったのが始まりとされる。他方、仏教説は、鎌倉時代、文永二年(1265)日蓮大聖人が上総国鷲巣（現・千葉県茂原市）の小早川家（現・大本山鷲山寺）に滞留の折、国家平穏の祈願をこめたところ、十一月の酉の日、明星（金星）がにわかに動き出し示現したと伝わる。尊仏は七曜の冠を戴き、宝剣をかざして鷲の背に立つ鷲妙見大菩薩（わしみょうけんだいぼさつ）で、その立ち姿から「鷲大明神」・「おとりさま」と呼ばれた。「酉の日」とは、干支の日付での酉。干支を日・月・年に当てはめる暦法は中国・殷の時代（紀元前17世紀頃）に生まれ、諸説あるも、日本に伝わったのは飛鳥時代(592～710)、といわれる。春日部市の「粕壁酉の市」の始まりは不明だ。武蔵一宮　氷川神社（大宮）の「十日市（とおかまち/大湯祭）が延宝年間(1673～1681)の社記にあることから春日部市の酉の市も天明年間の頃には、始まっていたのかもしれない。「酉の市」で熊手の露店を見ると、いよいよ年の瀬を迎えたことを実感する。